

C—59 ズボンの折目線に関する研究（第8報）
—折目線第二因子があらわす捻れについて
（その3）—

高知女大家政 市川 一夫
松浦千代子
高知学園短大 ○寺内アヤ子

1. 前報においては、折目線第二因子の折目線に及ぼす影響について、数種の布地を用い部分的な実物大のもの及びその比例縮小したものにつき、2種類の脚型を入れて実験を行ない、その捻れを調べ相似性の検討を行なった。この部分的な布地使用による捻れと、実際にスラックスを縫製した場合の捻れとが一致するかを調べるのが本研究の目的である。

2. (1)基本型として文化式の作図(a)を取りあげ、その作図法に内向するように第二因子を取り入れたもの(b)、及び股ぐりの作図法に特徴のあるものとして学研の型(c)の作図法を用いてスラックスを縫製、比較する。

(2)第6, 7報で報告した試料と同形の大きさ(但し θ は実物と同じ)で、本実験に使用する布地を用い実験、捻れを求める。

(3)測定方法はスラックスは偏平型及び厚みのある型の被験者に着用させ、前報の場合同様に折目線の方角を調べる。

3. 作図法(b)では、偏平型及び厚みのある型の被験者に着用させた場合、作図法(a)及び(c)と比較して、折目線がこの θ では平行より内向きのスラックスに変化した。前報と同型のこの場合の試料による捻れの角度は、作図法(b)による実物のスラックス、即ち従来の作図法に第二因子を取り入れたものとほぼ一致する。従って今後スラックス作成の場合、この方法によって得られた捻れの角度を利用することができる。